描く世界 - 消す世界

粒子分解

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
描く世界‐消す世界

【Ｎコード】
Ｎ４０３７Ｌ

【作者名】
粒子分解

【あらすじ】
悩む。悩む。くだらない、分かってる。でも…考えてしまう。終わらない苦悩。
※微グロ注意※ちょっと病んでます。

線

「行かないで」

僕は叫ぶ。

そこは真っ暗闇。辺りを見渡しても闇、闇、闇――――闇。

僕は踏み出す。迷っていても仕方がない。徐々に加速し、走り出す。

すると、そこには一つの光。

「出口か」

光にあふれている。暖かい。眩しい。

急に体が浮いた。ふわり。宙を舞い、眩しくて開けられない瞼をさらに強く閉じた。

＊＊＊

今日の日付は9月１０日、まだ残暑が厳しいあのころだ。しかしそれでも日が落ちる時間はとても早くなっている。午後7時には辺りはすっかり暗くなっていた。

時間が過ぎるのは早いものだ。

年が明け。春が来て、夏が来て、今、秋を迎え、過ぎようとし、冬は訪れる準備をしている。
僕は今、家路についているところだ。忙しさのせいで時間を余り感じられていない。時計を見る。7時。もう、今日僕が起きてから13時間が過ぎようとしているのか。
疲れと、疲れのせいで、今、僕の顔は死んでいるのであろう。
チラと時計を横目で見据えた。7時15分…。たったこの少しの時間考えていると思っていただけで、時計の秒針は15分…1分は60秒、5分で300秒。すでに、1500秒も秒針を動かしている。早い。
7時30分までに着かないと、怒られてしまう。また僕はチラと睨むように時計を見る。また5分進んでいた。
僕は少し歩幅を大きくし、なおかつ速度も速めた。

「ただ今」

時計の針は6を差している。…30分ぴったりだ。

「あら、陽(ハル)おかえりなさい。疲れたでしょう？外は寒いし、お腹も減ってるでしょう？お風呂とご飯どっちが良い？」

子供のようにくしゃくしゃにした笑顔を僕に向けるのは、母さんだ。

「あぁ、母さん。先にお風呂に入るよ。」
「陽、顔が死んでるわよ？」

母さんはそういうと、僕の鞄を持ってくれた。僕は疲れ切った小さな声で返事をした。

「うん。」

僕は、制服を脱いで、綺麗に壁にかけた。消臭剤をさっと吹き。押し入れから、下着を出す。

シャツとパンツのままで部屋を出る。

僕は、洗面所の鏡を見た。じーっと見た。とても醜い顔だ。見た目がではない、中身だ。

ガリ、ガリ、……ガリガリガリ…ガリ。

僕は、顔を引っ掻く。醜い。

風呂場にに入り、軽く身体を洗い。湯船につかった。そして静かに瞼を閉じる。

人は愚かだ。人は身勝手だ。人は他人を犠牲にして、自分の居場所を維持しようとしている。

「そんなことはない、僕たちは平和を望んでいる」

なんて、何処かの誰かが言っていた気がする。でも平和と言う物は、所詮、都合よく捻じ曲げた綺麗言だ。

僕は、醜い。

ガリ、…ガリガリ。

顔を引っ掻く。爪の間にたまってしまう、

人間は、弱い。そんな小さなことだけで、痛みを感じる。

ガリガリガリガリ…ガリガリガリガリ……ガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリ――

僕は顔を引っ掻く。

風呂場の姿見を見つめる。――――僕は醜い。――――僕は醜い。

風呂から出て、シャツをパンツをはいた。タオルで顔を拭くと、ところどころに赤い斑点が着く。タオルの繊維でさえ傷口に触れると痛い。――――人間は弱い。

僕は軟膏を取り出し、傷口に塗る。クリーム状の物質でも痛みを感じる。――――僕は醜い。

また、鏡を見つめる。――――僕は醜い、僕は醜い――――僕は弱い――――

「陽～！、ご飯出来たわよ！、お風呂あがってるんだったら早く食べて頂戴」

「あぁ、母さん」

僕は、軟膏を塗りたくった顔で、キッチンへと足を運んだ。

「陽…また…したの…？」

「母さん…ごめん。」

母さんは、酷く悲しい目をした、目元の笑顔で出来きるであろうしわが、より一層に悲しいという感情を引き立たせている。

「…まぁ、早く食べちゃいなさい。ハンバーグよハンバーグ！」

母さんはすぐに表情を元に戻した。心配していないのか、またはもう成れってしまったのか…もしかしたら、もう、そんなことどうでもいいのか。

僕は椅子に腰かけ、食べ始める。いつも通りのハンバーグ。美味しい。

疲れは少し癒え、僕は「正常」に戻りつつあった。

さっさと、食べて食器をかたす。

「陽…疲れてるとおもうから…もう寝なさい」

「…うん。分かったよ、今日は寝る」

僕は母さんにこたえて、今日は寝ることにした。

――ガリ――――ガリガリガリガリガリガリガリ――――――――――

自分の手を眺める。爪の隙間についた皮膚。指先に付着する血液。

――――僕は、醜い。――――僕は脆い。――――

――――醜い。醜い。醜い。醜い。醜い。醜い。醜い。醜い。醜い。醜い。醜い――――

存在する理由が分からない。

線（後書き）

…うーん。なんか微妙だな

縁

翌朝、顔が痛くて起きた。塗っていた軟膏は、すでに干からびてしまって、からからに乾いている。傷はプックリと膨れている。僕は痛いと感じて当たり前だと感じているのに擦った。

――痛い。当たり前に、痛い。

僕はそんなことを考えながら、動き出す。朝の尿意だ。

僕は、ベッドから降りる。一歩踏み出す。――当たり前だ。

僕はトイレのドアノブをひねる。――当たり前だ開けようとしているのだから。

昨日から晴れないこのモヤモヤは何なのだろう。

僕は用を済ませ、一っ階へと降りる。

「陽(ハル)おはよ〜」

母さんは今日も早くから起きて朝の支度をしている。キッチンはすでに料理のにおいと、開けられたカーテンから差す、太陽の日差しで、薄暗く、縁取られている。

僕は時計を見た。5時…まだ、朝の5時か。

昨日とは違う、時間の流れが遅く感じる。――そんなことはないのだけれど。僕がそう感じているだけだ。今日も一秒の間隔は変わりはしない。ただそう思いこんでいるだけ。そう思い込んでいるだけ。

まだ、早いが僕は制服に着替えた。まだ薄暗い空を無表情のまま、見上げる。

僕はベランダへと出た。いくら薄暗くても起きたばかり。世界の明るさにまだ、瞼を大きく開けるのは少し眼が痛い。痛い。

何時も見ているはずの太陽なのに、この「人間」という、魂の器はたった少しの時間の間でその慣れを壊してしまう。
笑える。
僕は久しぶりに笑った。本当に久しぶりだ。———くだらない。
くだらない———こう、思うことが時間の無駄だ。

「陽〜ご飯。」
「あぁ、今行くよ」

飽きた。この日常。同じことを繰り返す。昨日も聞いた「陽〜ご飯。」一昨日言った。「あぁ、今行くよ」同じことの繰り返し。——繰り返し。

そこで、一つ僕の頭…いや身体。……いいや心から疑問が浮上する。

———何時から、そう、思うようになった?———

分からない、分からない…分からない。
そう考えたところで…どうせ僕はこうしか思わない。「どうでもいい。」

ご飯は、目玉焼きとハムと、パンだ。まぁ、うまい。———どうでもいい。
そんなことはどうでもいいんだ。どうでも…。

また、いつものように僕は、食器を片づける。

僕は、バックをとりに行き、玄関で靴ひもを固く縛って、僕は今日も学校へと向かう。———どうでもいい。

「あ、ハルハルおはよー！」
誰だっけかコイツは…。誰だか分かっている。そう、分かっているからこそ誰だか分からないふりをしてみる。――――どうでもいい。
「おまえ…誰だっけ？」
「うわっ、ハルハルひでぇよ…幼馴染しかも女子！に向かってその態度わないでしょ～！？」
――――どうでもいい。
「…あぁ分かってるよ。奈穂。……ただ、知らない人だと思えば…ナニカ変わると思ったんだ。」
僕は自分でも可笑しいと感じたの、だんだん声の大きさを落としていく。
「ハルハル…今日は特別面白いことを言うね？何かあったの？……顔傷だらけだし。…も、もしかして…またやったの？」
図星過ぎて何も言えない。けど僕は言葉を紡ごうと必死に口を開いてみる。
「あはははは…」
駄目だ。笑うしかできない。――――無意味だ。

「陽。……陽にはあたしが居るからね…困ったらあたしが居るから。」
菜穂…菜穂…どうしてお前はいつも…優しいんだ――――救われる。
「…うん。」
菜穂は僕の制服の裾先をキュと掴む。
「陽…あのさ。」
「…なんだ？」
「腕…組んでもいいかな？」
「あぁ。」
「『……』」

僕らは黙り合う。菜穂は僕の左腕に、自分の腕を入れて、さらに胸部を押しつける。――柔らかい。――いいにおい。――嬉しい。――いやされる。

「なぁ、菜穂」
「う？」
菜穂は１５センチほど低いところから僕を見る。――いやされる。この上目づかい。生意気な口調。――ムカつく。

「いいや、お前は本当にムカつく。ただそれだけだ。」
「な、なにそれ…意味わかんないんだけど！！？」
声は大きく張っているが、全く菜穂の声に怒りと言う感情は無かった。――優しい。――僕を包む声音が。――反面、ムカつく。その声が。

――お前は本当にムカつく。――どうでも…いい。

チキキキ、ザク……チキキ…キキ…パタ……パタタタ。
――僕は何故こうも醜いのだろう。なぜ僕を醜い器に入れた？僕が何をしたんだ？――僕は醜い。
僕は自分の腕を見る何本も何本も赤い線が残っている。でも血は流れていない。拭いたのか？いや、傷口どころか、傷だったところは完全に塞がっている。じゃぁ…誰の？
――分からない。

僕の目の前には涙を流す少女が一人。「＊＊＊＊…痛いよぅ…。」
＊＊＊＊？誰だ？それは？
＊＊＊＊お前が誰だよ。

＊＊＊＊なぁ、答えろよ。

なぁ…答えろよ。＊＊。

記憶から削り取れた。深い闇に覆われる感覚が僕を襲う。――

これで何度め？

こ　れ　で　何度め？

な、ん、ど、め、？

誰がこんなことしたんだよ…。＊れだよ。だ＊だよ。

――分からない。

脳によぎるのはその一文だけだ。それだけだ。

アイディア（前書き）

えーと本番です。プロローグです

アイディア

ここは何処？私は誰？アナタはだれ？

そんなこと僕に聞かないでくれ僕だって解らないんだ。

だからきかないでくれよそんなこと。

ここは真っ暗闇だった。何もなかった。何も。何もだ。

真っ暗で見えないだけかもしれない。

僕は、……僕らはか、この真っ暗闇で二人で居た。それしかわからない。

僕は「僕」。もう一人は知らない。

延々と問いかける彼女。

それしか僕に理解できてることは無い。

ここは真っ暗闇。

すると、彼女の声が止んだ。

すう、すうと息が聞こえる。

寝てしまったようだ。

真っ暗で何処に居るか分からないけど。

声の間隔で、距離が解ると思ったけど。隣にしかその声は聞こえない。

手を伸ばしてもそこには何もないのに。

声しか聞こえない。

彼女のことはおろか、僕自身の体さえ感触がない。

ここはただの真っ暗闇ではないようだ。
ここは…真っ暗闇。―――じゃないんだ。なんとなくわかってきた。
……ここは『無』なんだ。
そう認識を変えた途端に、僕は光に包まれた気がした。

眩しい。これはなんだ？暖かい、暖かい、
僕を包み込む優しい温もり。けどそれは眩しい。
僕は閉じた目を懸命に開こうとした。でも、瞼は重くて、ピクリとも動こうともしない。
そういや、人生諦めが肝心って、誰かが言ったな。
僕はそう思いながら目を開くことを諦めた。

＊＊＊＊

「…んっ」
なんだ、すぐに開いたじゃないか。…なんでそんなこと思ったんだろう？
僕は目を見開いた。かすかに窓から差す、日の光を見た。
今日も朝を迎えた。
いつもと同じ朝。
幾度となく繰り返した「日常」
そんなものに「嫌気がさした」なんて、変なことを言う人もいるけど、この平和的な日常が一番だと思う。

毎日毎日、同じような日々。
僕はそれを望んでた。

でも、それは。容易く
削り取られていった。

――――ねぇねぇ、新しい世界を見たくはないか？君にこの力を分けるから僕を喜ばしてみてよ。出来るだけ残酷で、醜くて、…とにかく理不尽的ならそれで良いよ。君の闇を、そのるだらない日常を、さぁ、自分で壊してみてよ。

そういって僕は絵筆を握らせられていた。
不思議だ。なんでだろう。おかしい。解ってる。でも、不思議と目の前に居るナニモノか解らない人物？…いや形なども、何もなかった。
さっきの夢とはちがう。眩しいナニカ。
すると彼は、彼女は、僕に笑いかけ（無表情だったかもしれない）僕をキャンパスの前に座らせた。

――――さぁ、初めてくれよ私を喜ばすことのできる狂気的な世界を、私は期待しているよ。

ブラックアウト。

目の前が真っ暗になった。

アイディア（後書き）

次は説明になると思いマフ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4037l/

描く世界‐消す世界

2011年10月6日20時36分発行